

翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳

— 村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳を例に —

永田小絵（獨協大学国際教養学部言語文化学科）

平塚ゆかり（フリーランス中国語通訳者・翻訳者）

This paper focuses on translators 'Cultural Pre-Structure' to discuss the reformulation process of original texts into target texts. 'Cultural Pre-Structure' is in the subconscious of the people and affecting the action of them, and it is one of the factors that affect the translation acts as intercultural communication. We can say 'Cultural Pre-Structure' is 'filter of the subconscious' which is the inner world of the translator, and affecting the actions of their translations. Specifically, this paper analyzes two texts translated by different translators to illustrate a fact that translations vary depending on their cultural backgrounds of translators.

This paper makes a comparative study of two translations of Murakami Haruki's 'Kafka on the shore'. In comparison the two Chinese translators works, both Lin Shao Hua and Lai Ming Zhu, this paper verify the two linguistic background, ideology, and the purpose of translation, which is based on the hypothesis of 'Cultural Pre-Structure' produce a different style of the translation.

1. はじめに

翻訳行為において、翻訳者は原作に対して「原文をなるべく再現しよう」という意識に基づいて翻訳を行うだろうか。あるいは、翻訳者はその他のルールや基準に従って翻訳を行うのだろうか。

古代から現代に至るまで、翻訳にかかわる人々は「翻訳はいかにすべきか」に心を砕き、翻訳のあるべき姿についてさまざまな形で言及してきた。翻訳者は自らの翻訳

NAGATA Sae and HIRATSUKA Yukari, "Translation as Inner Reconstruction by Translators: Two Translations of Murakami Haruki's 'Kafka on the Shore' as a case in point," *Interpreting and Translation Studies*, No.9, 2009. pages 211-233. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

作品に「訳者序文」、「訳者あとがき」を付して翻訳の苦勞や工夫および自分なりの基準について語り、読者は「意識か直訳か」あるいは「こなれた」、「読みやすい」、「晦渋な」、「翻訳調の」等の表現で批評を加え、批評家は翻訳されたテキストを分析して是非を問う。とりわけ、翻訳に対して何らかの批判が加えられたときには、翻訳者は往々にして「そのように訳した理由」を述べて非難に論駁し正当性を主張しようとする。

翻訳者は個々のテキストに向き合い翻訳するという行為に先立つ何らかの拠り所や基準を最初から持って翻訳に取り組むものだろうか。2009年6月28日に立教大学で開催された日本通訳翻訳学会翻訳研究分科会において「こういうふうに訳そう、と意識して翻訳しているのではなくて、訳文が降ってくる感じ」という発言があった。この発言から思い出されたのは林語堂の「論翻訳」(1932)¹にある“auto-dictation”という概念である。林語堂は次のように述べている。

「翻訳の文章を生み出す際には表出すべきまとまったイメージ (total concept) が翻訳者の脳裏に存在していることが必要である。--中略-- 良い文章を書くときには恰もその文章の音の響きが聞こえるかのように全体の概念が浮かび (auto dictation)、それが即興の演奏のように自然に現れ出る (extemporizing) と言う」(下線は筆者)。

こうした記述を非科学的であるとして退けることもできよう。しかし、翻訳者自身の率直な実感としての「訳文は自然に表れ出てくるもの」ということばを一顧だにせず、取るに足らぬものとして切り捨てることはできない。またコセリウ(1983)が「翻訳論における誤った設問と正しい設問」で述べているように、「翻訳」という言語現象 (product) から導かれる外的な規範と、「翻訳行為」という人間の営為 (process) を区別する必要性があるのではないかと考える。

本論文では、主に翻訳者自身に焦点を当て、翻訳の文体を決定する翻訳者の“Cultural Pre-Structure”²によって原作が翻訳作品としていかに再構築されるかを考察したい。

2. 翻訳者の“Cultural Pre-Structure”と翻訳者の主体性

“Cultural Pre-Structure”と呼ばれる概念は、人の潜在意識の中にあって人の行為に影響を及ぼすものであり、王恩科(2007, p. 6-9)は異文化コミュニケーション行為としての翻訳行為に影響を与える主な要因として、言語的差異や文化的差異、形而上の意識形態や翻訳者の言語的素地、文化的素養と文化意識、そして“Cultural Pre-Structure”を挙げている。王が「人の行う情報解読行為はゼロから始まるのではなく、自己の世界観や価値観、意識形態や既存の情報、過去の経験が基礎となつて行われる」(2007, p.9)と述べているように、本概念では翻訳者の個人的信条や成長過程

における言語環境、過去の経験による偏見や異文化許容の程度など全てが翻訳のアウトプットを決定する要因と考える。これは翻訳者の内的世界に存在する、その訳出行為に影響を及ぼす「潜在意識としてのフィルター」であるにとらえることができよう。

すなわち翻訳者の行う翻訳行為は、①原文との向き合い方の方向性を決定する②その方向性によって原文の表層、深層にある言語的文化的差異の転換を行う。③最終段階において、国や民族の文化・政治、イデオロギー等、あらゆる翻訳者を取りまく文化的、社会的コンテクストの影響を受けながら最終処理の方向性が確定し、その処理方法に基づき明文化がなされ訳文が産出される。以上三段階の訳文産出過程において①と②の段階において“Cultural Pre-Structure”が影響しており、それ故同じ原文の翻訳でも翻訳者によって訳文に明確な違いが現れると考えられる。特に②の段階における原文の深層にある差異の転換処理は、表層にある差異の転換処理よりも“Cultural Pre-Structure”に拠るところが大きいと推測する。

一方、今日まで中国の翻訳界の主流を占めてきた価値観に「信達雅」（嚴復 1898）³、「神似」（傅雷 1951）⁴、「化境」（錢鐘書 1964）⁵等がある。ここで再度その主張について確認しておこう（日本語翻訳はすべて筆者による）。

「信達雅」：信とは、原文に対する信義、すなわち忠実さである。達とは、達意の訳文であり、原文の言わんとするところを完全に伝達することである。雅とは、格調ある文章表現である。原文の対する信を守るだけでも非常に難しい。また、信を顧みて内容の伝達が阻害されるようであれば翻訳しなかったのと同じだ。格調を備えた文章表現がなければ内容が確実に伝わらない。

「神似」：翻訳は絵画と同様で、その求めるところは形の相似ではなく、精神の相似である。英仏・英独間のような共通性のある言語間でも翻訳が難しいが、西洋の言語と中国の言語のように遠く離れた言語間では原文の精神を生かして意を伝達することが必要となる。

「化境」：文学翻訳の最高基準は「化」である。文学作品を一つの国の言葉から別の国の言葉に転換するときには、言語習慣の差異による生硬で牽強な痕跡が見て取れるようではならないし、もともとの風格や味わいを保ってこそ「化境」に入ることができたと言える。

なお、「化」は本来的に「発展、生長、進化」による変化という字義を持っており、「化境」とは発展昇華の末に達した「最高境地」を指す語である。これを翻訳にあてはめて論じた錢鐘書は「化境」を「翻訳によって新たな生命を与えられた文学における最高の境地」であると考えていた。

以上の概念は中国では TT（目標テキスト）のあるべき姿を示すと同時に翻訳者の持つべき態度を規定するものとして受け止められ、翻訳者の普遍的な支持を得ている。

では、こうした結果を生み出すために翻訳者はいかなる能力と技巧が必要であろう

か。林語堂は「論翻訳」(ibid.)において以下のように述べている。「翻訳の芸術が頼るのは、第一に翻訳者の原文の字句と内容に対する徹底的な理解、第二に翻訳者の非常に高度な母語の運用力、つまり達意の中国文を書く能力、第三に翻訳の訓練を積むこと、翻訳者は翻訳の基準と処理の方法について正確な見解があること、である。この三者を除いて翻訳にはいかなる規範も存在しない」。すなわち、ある文学作品が外国語に翻訳されて高い評価を得るためには適切な翻訳者が存在しなければならないと言えよう。

3. 村上作品とその翻訳

村上作品について大塚英志(2009, p.10)は「物語構造の徹底化とでもいうべき事態が村上春樹には起きている」と述べ、さらに柄谷行人の「サブカルチャー文学が世界に届くのは構造しかないからだ」との主張を村上春樹に当てはめて論じている。また、村上春樹をテーマに開かれたシンポジウムの記録(2006)における各国の翻訳者の発言からも村上作品は「平易な文章」であると翻訳者に受け止められている⁶。以上から村上作品を「扱いやすい素材で組み立てられた美しい構造」であると定義すれば、彼の作品は翻訳者にとって素材を素材のまま生かすことも手を加えることも許容する、言い換えれば「取り組みやすく達成感が大きい」という魅力を持っているのである。このような特徴を持つ村上作品は世界に数多くの翻訳者を得ることができ、中国語圏では林少華(中国)と頼明珠(台湾)を代表的な翻訳者としてあげることができる。この二人の翻訳はこれまでも「同化⁷」(林訳)、「異化」(頼訳)の典型的な例として取り上げられているが、林訳と頼訳を比較すると、林訳はその中国語翻訳を読む我々に「中国らしさ」を感じさせる文章になっており、原文にぴったり寄り添うように丹念に訳されている頼訳は、伝統的な中国文学の観点からは美文とはいえない。この二人の翻訳者の文体を分ける要因となっただのは何なのだろうか。

本論では村上春樹の作品の中国語翻訳を2種類取り上げ、以上に提起した翻訳者個人の要因が翻訳作品にいかに関与するかを検証していきたい。村上作品の中国語翻訳は何種類か出版されているが、特に注目されている頼明珠(台湾)と林少華(中国)のテキストを使った。この二人の翻訳は前者を「異化」、後者を「同化」の典型ととらえる論調が主流となっているが、作品に対するテキスト分析ではなく、翻訳者の側面から見るのが本論の目的である。分析の対象として選んだ作品『海辺のカフカ』は日本あるいは中国に関わる社会・文化的な差異の少ない作品であり、言語表現のみを比較することが可能である。さらに過去の研究や論評において中国語での誤訳や訳抜けが問題になっている外来語などが比較的少ない部分を抽出して比較を行う。

4. 先行研究

村上春樹の作品は現在まで45種の言語に翻訳され⁸世界中の読者に読まれている。中でも中国大陸、台湾ではこれまでに30作品以上が翻訳、出版されており、藤井

(2009)など多くの研究者が指摘するように、中国語圏ではこの20年間の社会的変容により都市文化の成熟が進み、それに伴って村上受容度が高まっていったと分析されている。その過程において「非常村上(すっごく村上)」などの流行語までが生み出されるまでになり、村上作品を語るHPやブログなどが多数開設され、熱狂的な村上作品愛読者は相当数にのぼると見られる。また村上作品を様々な角度から研究する学者、研究生も数多い。

それ故、村上に関する先行研究は枚挙に暇がないが、後述する于(2009)も言及するように、今までの村上に関する先行研究はその作品、作家自身に関するものが主流であった(p.153)。しかし近年では、文学研究者、翻訳者を招聘し日本において開催された2度のシンポジウム⁹を契機に、翻訳という観点から村上作品と社会における受容を論じる研究も徐々に増えてきている。

本論の先行研究として、翻訳文体から中国語圏社会における受容について分析、考察した論考である藤井(2007)、王(2009)、張(2009)、関(2009)、楊(2009)、于(2009)、許(2009)等が挙げられよう¹⁰。藤井(2007)は中国台湾香港の各社会における村上の受容を社会の変容、歴史的背景から分析しており、特に第4章では、林氏、頼氏、それに香港で出版されている葉氏を含む三氏の『ノルウェイの森』の訳文を比較検証した結果、林氏の言う「審美的忠実」¹¹を厚化粧と批判したうえで、頼氏の「お化粧せず、本来の姿を残す」姿勢に賛同する旨を述べている(p. 202)。

張(2009)、関(2009)はそれぞれ台湾、香港という社会的コンテクストから村上作品の受容について考察した論説であり、于(2009)は村上作品『ダンス、ダンス、ダンス』の中国大陆で出版された三種の翻訳本¹²の訳文分析研究である。楊(2009)は訳文からでなく翻訳文学としての村上文学受容における訳者の役割を考察したものである。このほか、村上春樹の『海辺のカフカ』のカタカナ訳を中心に林訳と頼訳の訳語分析を行った李(2007)などがある。

また“Cultural Pre-Structure”の概念を援用した先行研究としては、“Cultural Pre-Structure”が翻訳の創造性に与える影響を原文と翻訳作品の比較検証から分析した楊(2003)や、文学翻訳における“Cultural Pre-Structure”の運用メカニズムを考察した研究(劉 1999)等が挙げられる。同じ文学作品を訳出した複数の翻訳者の文体が異なる要因を“Cultural Pre-Structure”の概念から考察した研究としては劉(2002)があるが、これは“Cultural Pre-Structure”が翻訳者の母語運用の際に与えるマイナス要因に焦点を当て検証した論考である。

本論ではこれらの先行研究の成果を踏まえた上で、“Cultural Pre-Structure”という概念から、両翻訳者の言語的背景、信条、思想、翻訳の目的などを分析し、これらが両翻訳者の異なる翻訳文体を産出した要因であるとの仮説に基づき検証を行う。

5. 頼明珠と林少華、およびその翻訳観

まず、ここで翻訳者のプロフィールを簡単に紹介したい。

頼明珠（女）：1947年、台湾苗栗に生まれる。中興大学にて農業経済を専攻。卒業後、日本千葉大学に留学。帰国後はコピーライターとして活躍。文学、芸術、映画鑑賞、旅行などを好み、村上春樹の多くの作品を含む日本文学を選択的に翻訳している。

林少華（男）：1952年、吉林九台に生まれる。1982年、吉林大学大学院にて修士号を取得後、暨南大学外国語学部にて教鞭をとる。1993年から96年にかけて長崎県立大学に赴任し、96年帰国、暨南大学を経て96年から海洋大学、2002年に東京大学特別研究員、現職は海洋大学外国語学院教授。

次にそれぞれの翻訳に対する考え方を見ていこう。中国大陸に村上春樹の公式ファンサイトとでもいふべき「村上森林」というサイトがある。このサイトは、ネット上で「渡辺」と自称するオーナーによって管理され、「村上春樹の中国語ホームページ。『村上春樹全集』のダウンロード、『ノルウェイの森』等のオンライン閲覧、サイトのオーナーが収集した村上春樹の写真などを掲載している」とのことである。ここで「翻訳者紹介」として台湾の頼明珠と中国の林少華が紹介されている。同webページでは、サイト管理者の問いかけに対する頼明珠と林少華の回答が閲覧できる。長くなるが二人の翻訳者の主張を明らかにするために、以下にそれぞれの発言を日本語に訳して引用する。全て上述サイトの中国語記事をもとにし、必要に応じて編集、省略、要約、小見出しの追加を行った。

【頼明珠】

・個別言語、および作家の文体の特徴について

日本語と中国語はもともと異なる特徴を有しています。一般的に日本語は優雅で温和ですが、中国語は簡潔で力強いといえます。日本語の作品を中国語に翻訳するときには、なるべく日本語の特徴を保つのがよいと思います。中国語の基準だけで翻訳の良し悪しを論ずることは必ずしも適切ではないかもしれません。同様に日本語の作品もそれぞれの作家によって異なるスタイルを持っています。流麗な文章に特徴のある谷崎潤一郎のような作家もいますし、漢文調で簡潔な夏目漱石のような作家もいるわけです。

・言語にかかわる歴史的要因

日本は明治時代から積極的に西洋文化を取り入れ、翻訳が発展し始めました。そして日本語は徐々に翻訳のスタイルをその中に取り込むようになったのです。第二次世界大戦後、生活文化はアメリカの影響を大きく受け、外来語の使用が増えただけでなく、文章の構造にまで英語翻訳調が入り込んできました。

・村上作品の文体

村上春樹はアメリカ現代小説を好み、ご自身も翻訳がお好きだそうです。彼の文章にはアメリカの色濃い影響がうかがわれ、「和魂洋装」の作家と称されています。村上には最初から他人とは異なる文章、他人とは違うものを書こうとしており、独特の

スタイルを持っています。

・翻訳に関する留意点

なるべく成語を使わず、彼の意図と文意を保って、中国語を読むときにも村上の特色が感じ取れるようにしたいと思いました。

・林少華訳について

自分に比べて中国語に対する造詣が深いことに敬服しました。ただ、翻訳者自身の文章のスタイルがあまりに突出しすぎると作家自身の文体を弱めてしまう可能性があります。ライフスタイルが似通っているので、林先生の翻訳書は大陸の読者にとってはやはりより馴染みやすいものでしょう。

・社会・文化、読者の違い（台湾と中国）

台湾は数十年来、大陸の各省から移住してきた社会で、各地方の方言が長い時間をかけて溶け合い、自由闊達な新しい中国語を形成してきています。さらに国際交流に対してオープンですから、外来の事物を受け入れやすいのです。香港と大陸の出版物は台湾ではよく見られます。大陸の翻訳者による作品が台湾で繁体字版として出版されることもますます増えていきますし、台湾の読者から大変歓迎されています。

【林少華】

・個人の言語体験

子どものころから中国古典文学が好きで、漢詩をよく読み、とくに中年以降は宋詞に魅了されました。古漢語の生命力を現代の中国語に取り入れ、簡潔で洗練された文章を作ることは私のひとつの理想であるということが出来ます。

・翻訳と個性

翻訳においても、意識しているか否かにかかわらず、そうした傾向が多少なりとも現れるため、訳文に個性が出ることはあるでしょう。言い訳をするつもりはありませんが、全く個性のない、純水のような翻訳はありえません。これは程度の問題であって、個性を残すと同時に原作の風格や味わいをいかに伝えるかが重要です。訳文は水のようなもの、どのような形に変わっても水の質は変わりなく、よしんば形は変わらずとも地形によっては飛沫を上げる瀑布となり、曲がりくねる川ともなり、鏡のような湖ともなるのです。私の村上作品以外の翻訳を見ていただければわかるように、同じ「林商店」であっても、川端康成や三島由紀夫にはそれぞれ異なる文体があり、すべてが村上作品と同じ口調で訳されているわけではありません。

・翻訳批判について

（翻訳が忠実でない、特にジャズの曲名やバンド名を間違っ

せておくしかないのです。私の好きな言葉に「是非は己に審かにし、毀誉は人に聴き、得失は数に安んじる」というのがあります。いわんや、私がジャズに暗いことで笑うに笑えない誤訳をしたことは確かです。省略や改編については誓って申し上げますが、そのようなことは絶対にありません。誤訳や訳し漏れはきっとあるでしょう、しかしこれは省略や改編とは違います。自慢と思われてもかまいませんが、北京の日本学研究センターがかつて「コーパス」を立ち上げたとき、『ノルウェイの森』などの拙訳と原文を対照したことがありました。その結果は「指示語一つ一つにいたるまで巧妙に処理されていることが分かった」そうですが、これはもちろん大きな間違いでしょう。そこまでするのは不可能です。

・美文について

(『ノルウェイの森』の素晴らしさは原作ではなく翻訳の美しさにあると言われていくことについて) 文学は人に美を感じさせるものです。文意から美的な連想を呼び起こすのです。美を感じさせない文学作品は良い作品とはいえません。翻訳においてはできる限り美しい文を書くことを心がけました。中国語を他の外国語と比較したとき、最も大きな特徴は装飾性を尊ぶことにあります。中国語のこの優位性を発揮しない手はないと思います。

・頼明珠の翻訳について

同業者なのであれこれ言いたくはありませんが、正直に言えば頼さんの翻訳は不十分だと思います。「味わい」を十分に訳し尽くしていません。村上作品はストーリーも優れていますが、それ以上に重要なのは「味わい深さ」や「情緒性」です。「味わい」を訳せない翻訳には欠落があると感じます。

・翻訳の実践について (聞き手のまとめ)

林少華が一日に翻訳できるのはせいぜい 3000 字、机上には必ず中国の散文の名作を置き「感覚を呼び起こし」、コンピュータは使わず手書きで執筆し、何度も書き直す。「翻訳は小さな虫の彫刻を作るようなもので、細心の注意をもって行わなければならない」と言う。翻訳作品の味わいには、訳文に和臭(日本語的な表現)が現れた翻訳調もあれば、個人が長期にわたって中国語の世界の中で培った文学的悟性である内在的な「味わいの深さ」もある。林少華は原文への忠実さに話が及んだとき、翻訳をピアノ演奏にたとえて、楽譜は一種類でも演奏家による違いがある、自分に内在する個性を発揮してこそ本物の演奏家であると述べた。

6. 翻訳者の内側に存在する資源—“Cultural Pre-Structure”

本章では林少華、頼明珠両氏の“Cultural Pre-Structure”の相違を見ていく。前述したように両翻訳者の“Cultural Pre-Structure”の違いが異なる訳文を産出する要因であるとの仮説に基づき、両者の言語的背景、思想や信条と翻訳行為の目的を本人の言説を元に分析する。

6.1 翻訳者の言語的背景

翻訳行為を行う翻訳者にとって母語の運用能力は不可欠な要素の一つであるが、母語である中国語に対する両者の考えはどのようなものだろうか。

6.1.1 林氏の言語的背景

林氏は本人の言説によると、幼い頃から中国古典文学を好み、唐詩、宋詞などに造詣が深い。当時の中国での教育事情により自分の希望とは関係なく吉林大学で日本語を専攻することになったが、1982年吉林大学大学院にて修士号を取得し日本文学を教える教員となる。そして1989年から村上作品の翻訳に携わるようになり現在に至っている。この間、長崎県立大学から招聘を受け客員講師を3年間勤め、2002年には国際交流基金のフェローシップで東京大学特別研究員として1年間日本に滞在している。

村上春樹の公式ファンサイトにおいて「(林氏は) 翻訳に際して、美文にすることに重きをおいて行っているのではないか」との質問に対して「美を感じさせない文学作品は良い作品とはいえません。翻訳においてはできる限り美しい文を書くことを心がけました。中国語を他の外国語と比較したとき、最も大きな特徴は装飾性を尊ぶことにあります。中国語のこの優位性を発揮しない手はないと思います」と林氏は述べている。林氏は自らが幼少期から培ってきた母語である中国語、特に古典文学調の韻律や成語を非常に重んじ、翻訳の際にもできるだけ装飾性を駆使して古文調の言い回しや成語などを多用している。

許淵冲¹³はかつて文学翻訳の規範を自らの「信达雅」論として「①原文の内容に忠実に、②わかりやすい翻訳文体に、③訳文の優位性を発揮する」と語った(程 2006, p. 314-315)。この規範は許淵冲が特に詩や詞の翻訳の際に重視すべき論考として提唱したもので、許は①と②を必要条件、③を十分条件と結論づけている。ここで言う「訳文」とは中国語を指していると考えられ、許淵冲の文学翻訳論は林氏の主張する内容に通じるところが見られる。

林氏はまた次のようにも語っている。

文学作品は数学などの学問と違い $1+2=$ 任意の数字になり得ます。(中略) 皆さんが見ているのは私が理解している村上であって、良きにつけ悪きにつけ宿命的に“林商店”の烙印を押されたものなのです。100%オリジナルの村上というのは実践の視点から見たら神話なのです。

以上の言説は、林氏の「翻訳作品も含めた文学作品のあるべき姿は中国語の優位性を強調した美文である」との基本概念を示すものであり、林氏は自身の翻訳作品は原文がどうであれ自己のフィルターを通過した時点ですべて美文にすることが当然であ

るととらえたうえで訳出に臨んでいることがわかる。

特筆すべきは、前述した許淵冲の論以外でも中国大陸で出版されている楊(2005)や俞(2006)など多くの翻訳理論文献には、外国語から中国語への文学翻訳に関する記述箇所において、文化発揚に貢献する手段として、中国語の優位性を発揮し、訳文が原文を越えた美文になることを肯定的にとらえた論述が見られる。中国清朝末期において60作品以上もの世界文学の翻訳を手がけた林紓¹⁴など近代の翻訳作品にはこのような傾向が見られたが、西洋の翻訳理論の導入が進んでいる今日の中国において、この論調が未だ主流であると断定されるものではないが、いずれにせよ林氏の文体はこのような、いわゆる翻訳美学論を忠実に体现するものになっていることは確かである。

6.1.2 頼氏の言語的背景

一方の頼氏はプロフィールからわかるように、学生時代の専攻は日本語ではなく農業経済であった。中興大学農業経済学科を卒業後、研究助手を経て広告会社のコピーライターとして稼働し、1975年～1978年に千葉大学に留学するが、このときの専攻も農業経済であった。1983年頃に初めて村上作品に出会い、1985年から村上作品の翻訳に携わるようになり現在に至っている。

頼氏はインタビューに対して「一般的に日本語は優雅で温和ですが、中国語は簡潔で力強いといえます」と答えており、母語である中国語への訳出の際には「なるべく日本語の特徴を保つのがよいと思います。中国語の基準だけで翻訳の良し悪しを論ずることは必ずしも適切ではないかもしれません」と答えており林氏とは異なる見解を示しているが、これは頼氏がいわゆる異化の訳出姿勢で訳出に臨んでいることを示すものである。

頼氏は「翻訳の際にはできるだけ成語を使わず、彼(村上：筆者注)の意図と文意を保って、中国語を読むときにも村上の特色を感じ取れるようにしたい」とも答えているが、このことから頼氏は、翻訳は原文の姿を維持する事が重要であり、必ずしも美文にする必要はないと考えていることがわかる。また頼氏は林氏の中国語に敬意を表しながらも「翻訳者自身の文章のスタイルがあまりに突出しすぎると作家自身の文体を弱めてしまう可能性があります」と原文を越えた美文にする林氏の訳出姿勢に疑問を投げかけている。

両者の言説は、自らが運用するS TとT T、特に母語である中国語に対する背景や言語的習慣が両者の“Cultural Pre-Structure”として訳文に影響を及ぼしていることを示すものである。

6.2 翻訳者の思想・信条と翻訳行為の目的

ここで取り上げる思想、信条とは後天的な思想ではなく、“Cultural Pre-Structure”として存在する価値観、いわゆる形而上の意識、潜在的な理念を指す。

しかしながら、直接的なインタビュー等を行わず文字化された言説だけで潜在的な

理念、思想・信条をはかることはきわめて難しいと考える。ここではその潜在的な理念、思想・信条が現れていると思われる両者の翻訳行為の目的観を分析するにとどめたい。

王宏志（2007）は嚴復の提唱した翻訳論「信达雅」と嚴復の第1号の翻訳作品である『天演論』が自身の翻訳論に背いていたことを例に挙げ「嚴復の初期の作品（『天演論』）が『信』に背いていた理由は、嚴復が言語不一致だからではなく、嚴復は翻訳の目的を民衆喚起と救国の武器として考えていたからである」（p.8）と述べている。換言すれば、翻訳行為の姿勢、基準は翻訳者の形而上の意識とその根底にある目的観に影響されるとの意味を示していると言えよう。

近代中国における民意発揚のための翻訳作品と現代における商業的要素を持った現代文学作品とでは自ずとその翻訳の目的は異なるが、ここでは両翻訳者が長年にわたり村上作品の翻訳に従事している目的観の相違を両者の言説から検証する。

6.2.1 頼氏の翻訳の目的

頼（2009）や頼氏へのインタビューによると、自身が村上作品の翻訳に携わる事になったきっかけは、通常の読者として村上作品と出会い、村上の処女作『風の歌を聴け』の「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」という冒頭文の一言に惹かれてこの作家の作品を中国語に訳してみたいと考え、翻訳するようになったと語っている。頼氏の翻訳の動機は外部からの働きかけなどの要因ではなく自らが翻訳をしたいとの能動的なものであった。現在まで村上作品を30作ほど翻訳している頼氏は「もし読者が翻訳を読んで、この作品は西洋文化を愛するモダンな日本人作家が書いたものだな、と感じてくれたら何よりです」（頼,2009, p.334）と語っていることから、頼氏は自らの翻訳を通し、読者に村上作品自体を理解してもらうことを目的にしていることが推察できる。その目的達成のためか、頼氏の訳文は原文にほぼぴったり寄り添ったものになっている。頼氏は「完璧な翻訳など存在しない」（p.334）と前述の村上小説の言説を応用しながら語っているが、これらの語りからも、頼氏が村上テイストを最大限残すことを目的に、「異化」翻訳の手法で翻訳を行っていることがわかる。

6.2.2 林氏の翻訳の目的

林氏の村上作品を翻訳する目的は何であろうか。インタビューによると林氏は現在日本文学を教える大学教授であり、村上作品の翻訳に携わるようになったきっかけは出版社からの依頼によるものである。動機は頼氏と異なり、外部からの働きかけによる受動的な動機であった。

また楊（2009）によると、林氏は2008年に北京師範大学での講演の席上、村上春樹の日本語は「日本語らしくない日本語」で「伝統的な日本語と異なっている」が、

自身の翻訳で四字熟語を多用したことが功を奏し、村上文学の口語体とは異なる「いかにも中国語らしい中国語」の美文に変化したと語っている (p.131)。このことから林氏の翻訳の目的は村上文学における村上テイストをそのまま読者に伝達することではなく、「同化」翻訳の手法を用いて、原文を中国の伝統的な文体に再構築し、風格のある中国語文学に変化させる事が目的と考えていることがわかる。

7. 翻訳例の検討

以下に実際の翻訳例をあげて具体的に比較を行う。『海辺のカフカ』は大部の長編小説であるため、全ての例を抜き出すことは不可能であり、さらに全編を通してのサンプル収集では以下の各項目で言及する特徴と差異が特に目立つことの証左とはなりえない。そこでごく限られた範囲内 (第一章～第二章、およその文字数は原文 14,200 字、林訳 10,000 字、頼訳 12,200 字) から典型的なものをそれぞれ四例ずつ示し、林訳と頼訳の相違を明らかにしたい。頼訳はほぼ原作の文章をなぞるように訳されているため、主に注目されるのは林訳の自由度になる。

S (原文)、Ta (林訳)、Tb (頼訳) の順で示す。中国語に関しては [] でくくった部分あるいは訳文に適宜注釈または訳し戻し (back translation) を加え、理解の一助とした。底本として、原作は新潮文庫 2002 年版、林訳は上海訳文出版社 2003 年版、頼訳は時報文化社 2003 年版上巻を用いた。

7.1 成語、文語的表現

林訳と頼訳において最も相違が際立つ点である。

S1	土地のろくでもない連中とかかわりあうことになる p.16
Ta1	同当地的〔地痞无赖*1 同流合汚*2〕 p.7
Tb2	被当地的〔不良份子*3 盯上*4〕 p.12

*1: ごろつき、与太者。

→成語ではないが文学的表現に用いられる文章語

*2: 悪に加担し一緒に悪事を働く

→『孟子』を典拠とする成語。

*3: 不良

*4: 目をつけられる

→いずれもごく普通の口語表現。

S2	試験の成績では僕はいつもクラスの上位にいた p.20
Ta2	考试成绩我经常在班上〔名列前茅*5〕 p.9
Tb2	考试成绩在班上〔還一直算是上位的*6〕 p.15

*5: 試験で優秀な成績を収めた

→出典は『春秋左伝宣公十二年』、「前茅」は戦いの先頭に位置する先鋒軍を指す。

*6: ずっと上位に数えられていた。

→「上位」は日本語的で「和臭」を感じさせる。

1～2：林訳は、原文ではことわざ、熟語、慣用句などを用いていない部分にも四字にまとめられた成語を使っていることがわかる。

S3	人にかまわれないことはむしろありがたかった p.19
Ta3	不为他人理睬这点〔莫如说正中我下怀*7〕 p.8
Tb3	人家不理我・我〔反而覺得高興*8〕 p.14

*7：まさに思う壺だと言うに如くはない。

→「莫如説」や「正中下懷」は近代以前の章回小説（語り物小説）などによく見られる講談調の表現。

*8：かえって嬉しく感じた。

→ごく普通の口語表現。

S4	「ありがとう」と僕は言う。 p.25
Ta4	“谢谢。”我〔应道*9〕。 p.12
Tb4	「謝謝。」〔我說*10〕。 p.18

*9：答えて言う。

→「应道」の「道」は「言う」、現代口語では「説」と同じ意味であるが時代小説などに多用される。

*10：「僕は言う」の直訳。

3～4：林訳では他の部分でも「説」ではなく「道」を「言う」の訳語としばしば用いている。ここから原文の表現にかかわらず、近代通俗小説や時代小説に多用される古典的表現を好んで用いていることがわかる。頼訳では「道」は一度も用いられていない。

以上をまとめると、林訳は処々に古典に依拠する成語や古典的な語彙と筆法を用い、中国語翻訳に伝統文学の「味わい」を加味していることが明らかである。一方、頼訳はほぼ原文をなぞるように、ごく平易な口語で書かれている。

7.2 省略、補足

S5	どうして僕はそんなに楽しそうな顔をしているのだろう。 <u>いったいどうしてそんなに楽しそうな顔ができるんだろう</u> p.15
Ta5	我为什么做出那般开心的表情呢？ [---] *11 p.7
Tb5	爲什麼我看起來這麼開心的樣子？到底爲什麼臉上會有那樣快樂的表情呢？ *12 p.12

*11：（不訳）

→原文での繰り返しが訳出されていない。

*12：なぜ見たところそんなに楽しそうな様子なのだろう？いったいどうして顔にそれほど楽しそうな表情が浮かべられるのだろうか？

→「臉上會有」に原文どおりに訳そうとする意識の感じられる箇所。

S6	僕がかよっていたのは、主に上流家庭の、あるいは <u>ただ単に</u> 金持ちの子供たちを <u>集めた</u> 私立中学だった p.19
Ta6	我上的是一所私立中学，里面几乎全是上流家庭或有钱人家的子女*13 p.8
Tb6	我所就讀的是，以上流家庭爲主的，或者可以說只是單純聚集有錢人的孩子的私立中學 *14 p.14

*13：僕が通っていたのは私立中学で、ほとんどが上流家庭か金持ちの子供だった。
→「ただ単に～集めた」が訳出されていない。

*14：僕が学んでいたのは、上流家庭を主として、あるいはただ単に金持ちの子供を集めたといってもよい私立中学だった。
→頼訳は林訳と対照的に原文よりも情報量が増えている（「可以說」の部分）。

5～6：林訳は本来の中国語らしい簡潔さで翻訳されているが、頼訳は原文に忠実であろうとするあまり中国語としては回りくどい文になっている。

S7	白い泡になった波が足元を洗っている p. 15
Ta7	已成白沫的浪花〔冲刷着脚前的沙滩〕*15 p.6
Tb7	化成白色泡沫的海浪〔正冲洗著腳邊〕*16 p.12

*15：波が足元の砂浜を洗っている。
→「砂浜を」が書き加えられている。「波が足を洗う」という表現は理屈に合わないと考えたのだろうか。

*16:ちょうど足のあたりを洗っている

S8	父は母の映っている写真を一枚残らず捨ててしまったようだ p.16
Ta8	父亲好像把母亲的相片〔烧得一张不剩了〕*17 p.7
Tb8	父親好像把母親的照片〔一張也不留地全丟掉了似的〕*18 p.12

*17：焼いてしまって一枚も残っていない。
→「焼く」という情報が加えられている。原文には「一枚残さず焼いた」とは書かれていないが、林訳では写真を焼き捨てたことになっている。

*18：一枚も残さず全て捨ててしまったようだ。

7～8：林訳は原文にない「砂浜に打ち寄せる」、「焼き捨てた」という情報を加えることによって、よりイメージを鮮明にわかりやすくする工夫をしている（とはいえ、原文どおりに訳された頼訳に理解しにくさや論理的な欠陥は特に見られない）。

7.3 情報提示の順序

S9	サングラスも年齢をかくすために必要だ。濃いスカイブルーのレヴォのサングラス p.14
Ta9	太阳镜也是需要的，深天蓝色的，要用来遮掩年龄*19 p.6
Tb9	爲了掩飾年齡也有必要戴太陽眼鏡。那是深天藍色的Revo太陽眼鏡*20 p.11

*19: サングラスも必要だ、濃いスカイブルーの、年齢を隠すために使うのだ。

→「年齢をかくすために」が文末に移動している。なお、レヴォが訳出されていない(林訳ではしばしば外国製品のブランド名などが不訳になっている)が、ここでは取り上げない。

*20: 年齢を隠すためにサングラスをかける必要もある。それは濃いスカイブルーのRevoのサングラスだ。

→中国語の構文法にあわせるため「年齢をかくすため」が文頭に移動。さらに名詞句のみのセンテンスや体言止めをほとんど用いない中国語の習慣にあわせて、文頭に「それは」という主語を立てた。

9: 日本語では「サングラスも・年齢をかくすために・必要だ」という語順が許容されるが、中国語では「サングラス（をかけること）も必要だ」という語順しか許容されず、そのため原文の語順を完全に保持することはできず、頼訳のように「年齢をかくすために・サングラス（をかけること）も・必要だ」という文にするか、あるいは林訳にあるように、独立したフレーズとして「年齢をかくすために・使うのだ」と加えることしかできない。

S10	それは尋常ではない光景でした。P.36
Ta10	情形絶不正常*21 P.18
Tb10	那是很不尋常的光景*22 P.25

*21: 光景はきわめて異常であった。

→「それは」を不訳にし、「光景」を主語とした。視点が話し手にあることがやや不明確になっている。但し、中国語では上述のとおり目的語の役割を持たない体言を文末に置くことは少ないため(Googleで検索すると“情形很不正常。”の用例は188,000件、“很不正常的情形。”では僅かに6件)、林訳はより自然な中国語に訳されていると言える。

*22: それはとても普通でない光景だった。

→原文のまま。

S11	15歳の誕生日は、家出をするにはいちばんふさわしい時点のように思えた。p.17
Ta11	我觉得十五岁生日是最适合离家出走的时间*23 p.7
Tb11	15岁生日，感覺上似乎是個離家出走最適的時點*24 p.13

*23: 僕は15歳の誕生日が家出にもっとも適した時間だと思った。

→「我觉得（僕は思う）」によって話し手の意思を導く自然な話し言葉になっている。

*24: 15歳の誕生日は、感覚的には家出にもっとも適した時点のようだった。

→「15歳の誕生日」が文頭に提示され、主題を取り立てている原文の情報提示の順序を尊重したが、「感覚上」や「時間点」に翻訳調を感じずにおれない。

S12	中学校に入ってから2年間、僕はその日のために、集中して身体を鍛えた。 p.17
Ta12	为了这一天，上初中后两年的时间里我一直努力锻炼身体*25 p.8
Tb12	在上了中學之後的兩年之間，我就爲了這一天的來臨，而集中精神鍛鍊身體*26 p.13

*25: その日のために、中学に入ってから2年間で、僕はずっと努力して身体を鍛えた。

→上述とは異なり、「为了这一天（その日のために）」を文頭に取り立てて強調している。

*26: 中学に入ってから2年の間、僕はその日の到来のために、精神を集中して身体を鍛えた。

→ここでも原文の情報提示の順序に則った訳文を作っているが、「...的來臨（...がやってくること）」を付け加えたため、「而」という接続詞を追加しなくてはならなかった。

10~12: 林訳が日本語の原文に忠実であろうとするよりも、中国語文に対する自らの美意識に忠実であろうとする姿勢が見られる部分である。頼訳では原文の情報提示順序に従って訳文を形成するために原文にはない文法成分を追加せざるを得ず、訳文もやや冗長になっている。

では、こうした相違は中国語を母語とする読者（とりわけ中国大陸の読者）にとっては、どのように捉えられているのであろうか。林訳、頼訳ともに、出版された地域で爆発的な売れ行きを示したことから、いずれも読者に好意的に受容されていることが明らかであるが、ここでさらに両方の翻訳を読み比べた中国語母語話者の感想をいくつか紹介したい。これは筆者（永田）が大学で担当する科目「翻訳理論」の授業において二種類の翻訳を読ませた後に原文を提示してから書かせた感想文の一部である。クラスには中国語を母語とする留学生が三名出席していた。これらの学生はこの授業で初めて村上作品に触れている（原文も中国語翻訳も読んだ経験はない）。

学生A（内モンゴル自治区出身）：林さんの翻訳が読みやすく理解しやすいです。台湾の頼さんの翻訳は意識的に日本語の原文のままに訳しているみたいで、中国語を十分に活用できてないと思います。頼さんは一文字も残したくないほど、原文のままに訳していて学校の教科書を読んでいるみたいです。林さんは文字だけの翻訳ではなくまとめて簡単に訳しているようです。作者の書いた文字ではなくて、作者の気持ちをそのまま簡単に伝えられる翻訳がいちばんいいと思います。

学生B（福建省出身）：頼さんの文章は日本語をそのまま訳しただけで、文章が流暢ではありませんし、理解しにくいところがあります。また、余計なことばも多く、ときどき不自然な言い方をします。林さんの訳は流暢で、言いたいことがよくわかりますが、細かい点でちょっと雑なところもあります。

学生C(香港出身): 林訳は中国風で、中国の北の方で使う言葉に訳されています。そのせいで林訳は硬くて難しく、古典文学の特徴があります。頼訳の言葉遣いは簡単で現代文学のスタイルだと思います。林訳は言葉遣いが簡潔できれいな表現を優先して訳したと考えられますが、固有名詞の知識は頼訳がすぐれています。また、林訳は一つの文をできる限り短くし、四字熟語を使って情報を短く表現して句読点も省略しています。しかし、訳文の中に訳者自身の気持ちが入りすぎです。頼訳はできる限り忠実に訳し、構文をできる限り原文と同じにして、日本語と合わせています。村上作品は軽い描写を主としますから、頼訳のほうが原作を読んでいると感じられます。林訳支持派は中国人が多くて、頼訳支持派は台湾人と香港人が多いと思います。

二種類の翻訳を読み比べ、さらに原文と対照するという体験をした読者の感想ではあるが、ほぼ想定範囲内の回答となった。特に学生Aは林訳が原文と相違するものであることを認めながらも林訳を強く支持している。中国大陸出身の学生A、Bが指摘するのは頼訳が「中国語を十分に活用していない」、「流暢ではない」という点である。一方、学生Cは林訳の言語表現が美しいことは認めつつ、「古典的で難しい」との感想を述べ、現代文学のスタイルを保った翻訳としての頼訳が台湾・香港地区では支持されると指摘している。

8. 翻訳者に内在する翻訳に対する信条

ここで以上の検証内容から浮き彫りになった両翻訳者自身に内在する翻訳に対する信条について見ていき、本論の結論を述べることにしたい。

8.1 頼氏の翻訳に対する信条

頼氏は巖復の「信达雅」論を援用し以下のように語っている。

実用的な文章なのに難しすぎる場合には、わかりやすく訳す、いわゆる「達」が大切でしょう。しかし、文学作品、特に詩や韻文の場合は「雅」が大切でしょう。小説では、特に作者の作風が特別な場合、原作に忠実な翻訳、つまり「信」が一番大切だと思います。(中略)優れた作家の作品を訳す時、私は原文に忠実な「信」こそが命であると思います。「信」が良く伝われば、自ら「雅」が含まれると思います(頼 2009, p.329)。

事例研究からもわかるように、この言説の通り頼氏の訳文は村上の文体を残す形で忠実に訳出されている。村上はもともと平易な文体で小説を書いているため『海辺の

カフカ』でも原文に成語は余り見受けられないが、頼氏の訳文も「なるべく成語を使わず、彼（村上：筆者注）の意図と文意を保って」訳出している。

2006年のシンポジウムの席上、頼氏は「村上の表現の簡単さを生かすことが大事」との旨のコメントをしており、これに対しロシアからの参加者で日露翻訳者であるドミトリー・コヴァレーニンも「村上春樹の『無』の存在感は簡単な言葉でないと表現できないわけです」と頼氏の考えに賛同すると語っている。

また、前述の藤井省三氏は、2006年のシンポジウムの席上で、頼氏、林氏そして香港の葉氏の訳文を比較した結果として「私の印象では、頼さんの訳がいちばん村上春樹の文体に近い」と語っている¹⁵。

頼氏にとって村上作品は特別な文学作品であるために「ありのままに、忠実に」訳すことが大事ととらえており、頼氏の言説、事例研究であつかった実際の訳文にもその信条が現れているが、本論での検証を通して、頼氏の翻訳に対する信条は頼氏が村上作品の翻訳に関わる事になった時点で自身の“Cultural Pre-Structure”により「信（忠実性）」という信条が内在的に決定されていたのではないかと推察できる。

8.2 林氏の翻訳に対する信条

一方、林氏は自身の翻訳に対する信条として「原文を理解するためにはまず原文の表層的な文字、文章から離れなければならない。そうして初めて原文と融合し訳文を、『化』に至らしめることが可能になる。『信達雅』も『化』の一字に概括されるものである」と、自身の規範は「化境」にあると論じたうえで、「実はこれこそが高レベルの本当の忠実なのである」と自らの翻訳こそが原文に忠実であると主張している。これは原文の「表層言語・文化」と「深層言語・文化」を翻訳者がどうとらえ、どちらに対して忠実になるかという問題であり、文化的な差異をどう訳出していくかという翻訳の根本的な問題でもある。

林氏はまた「欧米文化は中国文化と全く異なるものであるという認識が存在するため、中国人には受け入れやすい。しかし日本文化はもとはといえば中国から伝わっていったものなのだが、中国文化とは似て非なるものであるためやっかいで、かえって中国人には受け入れがたいのである」と言及している。

確かに日本と中国は同じアジア、同じ漢字文化の国であり、日本は多くの文化的な恩恵を中国から受けてきている。それ故、互いに同じルーツを持ち、同じ文化を共有している同文同種である、との誤解は日中両国に存在しており、今日起こっている日中間の異文化摩擦の原因の一つにもなっている。

この文化的差異を処理するために林氏は「化」の見地から原文を離れ訳文を産出していると論じているが、事例研究からわかるように、林氏の文語調の訳文は確かに中国小説によく見られる中国的な雰囲気や醸し出しており、原文にある「和臭」¹⁶を消し去るに効力を発揮しているが、訳文の文語的文体の多用により、前章の学生Cの感想にもあるように、読者に現代小説ではなく中国の時代小説を読んでいる錯覚を起こ

させる可能性は否定できない。

今回、林氏の言説と事例研究として訳文を検証したが、この結果から、林氏の翻訳に対する信条は母語である中国語の古典や中国語の持つ音韻への憧憬という“Cultural Pre-Structure”と、後天的なイデオロギーや社会的文化の受容意識などが互いに影響しあった結果、「美文に転換すること」という翻訳に対する信条が生まれ、後にその信条が確固たるものになっていったのではないかと推察できる。

以上、翻訳者は翻訳作品を産出する際には、社会的コンテクストなど外的要因だけでなく“Cultural Pre-Structure”という翻訳者自身の内的要因が影響していることが示された。

Lefevere (1992)は「翻訳は、最も大きい影響力を秘めている。なぜなら翻訳は作者やその作品のイメージを、原文の文化の境界を越えて映し出すことができるからだ」(p.6, 筆者注：訳文はマンディ(2009)『翻訳学入門』p.198による)と主張しているように、原文である文学作品が翻訳者に内在する信条により全く違う作品に再構築されることは異文化コミュニケーションの視点から見ても至極当然なことであろう。

このような視座に立ち林氏、頼氏の翻訳作品を検証することで、これまで研究者や読者により繰り返されてきた村上作品翻訳に関する「兩岸(筆者注：中国大陸と台湾)論争」に何らかの決着点を見いだす可能性が生まれるのではないだろうか。

9. おわりに

三島由紀夫(1973, p.94)はかつて『文章読本』において「翻訳の二つの対照的な典型的な態度」として以下のように述べている。

一つは多くは個性の強い文学者の翻訳になるもので、どうせ外国の文物、風俗が完全にそのまま日本語に移されないということを承知のうえで、自分の個性の強い歯で外国文学を咀嚼して、自分の個性の色あいに染め上げ、しかも原作者に対する自分の精神と感覚の深い底からの愛情をそのまま翻訳に移して、あたかも自分の作品であるかのごとき癖の強い翻訳文を作る態度であります。もう一つはオーソドックスなやり方と考えられているもので、とうてい不可能ながらも原文の持つ雰囲気、原文のもつ独特なものを十のうち一つでも能うかぎり日本語で再現しようとする、良心的な語学者と文学者の鑑賞力を豊富に深くもった語学者との結合した才能をもつ人が試みる翻訳であります。

我々は林少華と頼明珠の翻訳をめぐる論争を通じて、上述の三島の指摘を思い起こさずにはおれない。日本における村上作品の翻訳に関する評価からは、いわゆる「オーソドックスなやり方」をよしとする傾向があることがわかるが、林少華は中国語を

支配する伝統的な美意識に則り、自らの内面に作り上げてきた言語世界の中で村上作品を再構築した。そして彼の翻訳した村上作品は、二種類の翻訳をはじめて読んだ中国出身の学生からも強く支持されることになったのみならず、最初の翻訳作品が出版されて以来、中国に大ブームを巻き起こし、多くの村上ファンを得ている。伝統的な美文で表現され、新鮮で力強い構造を有する物語の世界は、読者を魅了せずにはいらなかったのである。それは、中国清朝末期における林紓による外国文学翻訳の再来を思い起こさせる現象でもあると言っても過言ではない。

もちろん、林紓の翻訳や我が国の明治・大正時代に多く見られた「豪傑訳」などに比べれば林訳はきわめて穏当ではある。だが、林訳の分析、とりわけ頼訳との比較を通じて、文学翻訳の文章に翻訳者の個性が大きく反映されること、そしてその個性の成り立ちは“Cultural Pre-Structure”という概念によって説明できることがわかる。「翻訳は翻訳者によって決まる」—これはあまりに当然のことであるけれども、翻訳されたテキストだけに着目した研究ではおろそかにされてきた事実でもある。ここで我々は「翻訳はいかにすべきか」のみならず、「いかに翻訳者を選定するか」という基準もまた考慮されるべきものであることに気づくのである。

.....

【著者紹介】

永田小絵 (NAGATA SAE) 獨協大学国際教養学部言語文化学科准教授。最近の論文に「中国翻訳史における小説翻訳と近代翻訳者の誕生」—前編・後編 (日本通訳学会翻訳研究分科会編『翻訳研究への招待』1号 2007年・2号 2008年) がある。

平塚ゆかり (HIRATSUKA YUKARI) 日中通訳・翻訳者。2009年3月立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了。修士論文: 「『信達雅』再考: 日中通訳者の役割分析から」。2009年4月からISSインスティテュート東京校日中通訳者養成コース講師。

【註釈】

- 1 「翻訳を論ず」: 「論翻譯」 劉靖之編『翻譯新論集』参照。初出は吳天曙編『翻譯論』所収。1932年
- 2 中国語では「前结构(前構造)」。ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889~1976) が提唱した概念。
- 3 嚴復「天演論譯例言」: 『天演論』はハクスリー (Huxley, Thomas Henry) 『進化論と倫理学』(1893年)の中国語翻訳。「天演論譯例言」はこの翻訳書の序文である。劉靖之編『翻譯論集』P.1-2。
- 4 『高老头』重譯本序 (『ゴリオ爺さん』重訳本序文、1951年9月)。「翻译应像临画一样,所求的不在形似,而在神似」。本文は劉靖之編『翻譯新論集』P.68。

- ⁵ 銭鐘書『林紓的翻译』(林紓の翻訳 1964年)。原文は以下。“文学翻译的最高标准是‘化’。把文学作品从一国文字转化为另一国文字，既能不因语文习惯的差异而露出生硬牵强的痕迹，又能保持原有的风味，那就算得入于‘化境’”。
- ⁶ 『世界は村上春樹をどう読むか』に以下のような翻訳者の発言がある。「(村上作品は) 読んだらとてもおもしろかった。それまでの日本文学は、日本語がわかっている、何か発想の転換が必要なところがありました。ところが村上春樹の小説は、そういった転換をとくに必要としない」・「翻訳するのはとても楽しくて、あまり難しさは感じません」(以上、コリーヌ・アトラン)、「村上春樹は、文章の巧みさを見せつけることなく、どちらかといえば、ごく簡単な表現を使います」(頼明珠)、「彼の表現の簡単さを活かさなければならぬ」(ドミトリー・コヴァレーニン)、「だいたいにおいて、村上作品は困難という言葉が思いつかないほど英語になりやすい」(ジェイ・ルービン)等。
- ⁷ 中国語では「帰化」。
- ⁸ 2009年7月10日放送のNHK「クローズアップ現代」による。
- ⁹ 2006年3月東京、札幌、神戸において開催された国際交流基金主催による「国際シンポジウム&ワークショップ 春樹をめぐる冒険ー世界は村上文学をどう読むか」と2008年11月に東京大学文学部中国文学科主催で東大キャンパスにおいて開催された国際シンポジウム「東アジアと村上春樹」を指す。
- ¹⁰ ここで列記した張(2008)関(2008)楊(2008)于(2008)許(2008)それぞれの論考は、東京大学文学部中国文学科主催の東アジアと村上春樹に関するワークショップ、シンポジウムの報告論文である。
- ¹¹ 藤井(2007, p.195)によると林氏は「美化と言えど中国語自体が世界で最も装飾美に富む言語で、(中略)日本文学は日本料理のようなもので、淡白であり、淡白さを美とします。問題は同じくそんな淡白に訳した場合、中国人は必ずしも美しいとは思わないのです。私は日本人と中国人の審美的距離を縮めるために、時には許容範囲で数グラムの塩を入れるのです」と述べ、日中間の審美観の違いを考慮しそれを訳文に反映させた翻訳こそが忠実な訳であると主張している。
- ¹² 中国で『ダンス、ダンス、ダンス』の翻訳本が出版されたのは1991年であり、それぞれ異なる出版元から異なる翻訳者の訳を用いて出版された。本作品は最新バージョンとして林少華訳が上海訳文出版社から『村上春樹全集』の中に収められている。
- ¹³ 許淵冲(Xu Yuan Chong, 1921~)、江西省南昌生まれ、北京大学教授、翻訳家。『赤と黒』など多くの文学作品の中国語翻訳を手がけた一方で『詩経』、『楚辞』、『李白詩選』などの中国古典文学を英語、フランス語に翻訳し海外に紹介した。
- ¹⁴ 林紓(Lin Shu, 1852~1924)、字は琴南、福建福州の人。大学で古文と経学を教えるかたわら、西洋小説の紹介に尽力した。『椿姫』や『アンクル・トムの小屋』など多くの訳書があるが、実は本人は外国語を解さず、共訳者の口述翻訳をもとに古文の筆法で仕上げたものである。これらの「翻訳」小説が世に出た途端に大ブームとなり、翻訳者として名をなしたため、その後も同様の独特の手法で翻訳を続け、百八十余冊にのぼる西洋小説を世に送り出すことになった。新文化・新思想・言文一致には一貫して強く反対していた。
- ¹⁵ 楊炳菁(2009)は、中国国内では林訳が高い評価を受けているのに対し、日本の村上研究者達は林訳に対してほぼ否定的な見方が多く、これは日本研究界に「異化翻訳」への支持があるからだと指摘している。

- ¹⁶ 林氏は『落花之美』というエッセイ集の「“和臭”要不得(我慢ならない『和臭』)」(p. 140)の中で、原文が日本語とわかる日本文調の翻訳を『和臭』として、「中国人には受け入れがたいもの」と批判している。

【参考文献】

- コセリウ (1983)『コセリウ言語学選集—人間の学としての言語学』(4) 三修社
- 張明敏 (2009)「台湾人の村上春樹—『文化翻訳』としての村上春樹現象」藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』35-67 頁
- 藤井省三(2007)『村上春樹のなかの中国』朝日出版社
- 藤井省三(2009)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』
- 関詩珮 (2009)「知識生産の領域と村上春樹の香港における普及」(藤田玲・訳) 藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』68-128 頁
- 許金龍 (2009)「中国において村上春樹と大江健三郎を考察する」(石田朝子・訳) 藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』189-206 頁
- 国際交流基金 (企画) 柴田元幸・沼野充義・藤井省三・四方田犬彦 (編) (2006)『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋社
- 頼明珠 (2009)「100%の村上春樹に出会う」藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』322-340 頁
- 李詠青 (2007)「村上春樹『海辺のカフカ』の翻訳をめぐる諸問題：台湾・中国の中国語訳を中心として」『熊本大学社会文化研究 5』231-246 頁
- マンディ, J. (2009)『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳) みすず書房 [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies: Theories and applications. Second Edition.* London & New York: Routledge.]
- 三島由紀夫 (1973)『文章読本』中公文庫 (初出は雑誌「婦人公論」1959年)
- 大塚英志 (2009)『物語論で読む村上春樹と宮崎駿』角川書店
- 于桂玲 (2009)「中国版『ダンス・ダンス・ダンス』の版本研究—村上春樹の翻訳における受容と変容」藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』153-188 頁
- 楊炳菁 (2009)「文学翻訳と翻訳文学—中国大陆における村上文学の翻訳と受容をめぐる」藤井省三 (編)『東アジアが読む村上春樹：東京大学文学部中国文学科国際共同研究』129-152 頁
- 蔡新乐 (2004)《翻译的 本体论研究》上海 上海译文出版社
- 程永生 (2006)「国内现当代研究翻译理论之概况篇」马祖毅等 (著)『中国翻译通史 现当代部分 第四卷』(279-406 頁), 武漢 湖北教育出版社.
- 林少华(2006)《落花之美》北京 中国工人出版社
- 林少华(2009)「文体的翻译和翻译的文体」『日语学习与研究』2009年第1期, 118-123 頁
- 刘艳宾 (2002)「从释义学的角度论翻译中母语前结构的负影响」华中师范大学硕士学位论文

- 刘永红 (1999) 「论文学翻译的“前结构”及其运行机制」『中国俄语教学』1999 年第 4 期, 49-55 頁
- 劉靖之編 (1989) 《翻譯論集》台北 台灣書林出版有限公司
- 劉靖之編 (2003) 《翻譯新焦點》香港 商務印書館(香港)有限公司
- 孙艺风 (2004) 《视觉 阐释 文化 文化翻译与翻译理论》北京 清华大学出版社
- 王成 (2009) 「翻译的文体与政治」『日语学习与研究』2009 年第 1 期, 124-128 页
- 王恩科 (2007) 《文化视角与翻译实践》王恩科·李昕·奉霞(编著)重庆 国防工业出版社
- 王宏志 (2007) 《重译“信、达、雅”—20 世纪中国翻译研究》北京 清华大学出版社
- 王宏印 (2006) 《文学翻译批评论稿》上海 上海外语教育出版社
- 杨柳 (2003) 「文化前结构与翻译的创造性误读—林语堂英译《中国传奇》研究」『湖南大学学报』第 17 卷, 第 6 期
- 俞佳乐 (2006) 《翻译的社会性研究》上海 上海译文出版社
- Lefevere, A. (1992). *Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*. London and New York: Routledge.

参照webサイト (中国語)

- [Online]村上森林 <http://www.cunshang.net/main.htm> [2009/07/30]
- [Online]林少華『海辺のカフカ』訳者序文 <http://www.cunshang.net/book/kafuka/1.htm> [2009/07/30]
- [Online]頼明珠・林少華インタビュー <http://www.cunshang.net/fanyi.htm> [2009/07/30]

